露伴全集

第十六卷

昭和二十五年四月二十日印刷
昭和二十五年四月二十五日發行

露伴全集第十六卷
頒價五百圓

著作權者　幸田文
編纂　蝸牛會
發行者　東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地　岩波雄二郎
印刷者　東京都西多摩郡霞村根ケ布三八五番地　山田一雄
印刷所　東京都西多摩郡霞村根ケ布三八五番地　大化堂

發行所　東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地　株式會社　岩波書店
電話(代表)九段(33)二八七番
振替口座東京七四四一六番

目次

賴朝　明治四十一年九月　一
平將門　大正九年四月　一二九
蒲生氏郷　大正十四年九月　一九一
爲朝　大正十五年二月　二九三
論仙
仙人呂洞賓　大正十一年一月　三二五
扶鸞之術　大正十二年四月　四〇〇
活死人王害風　大正十五年四月　四二四
蘇子瞻米元章　大正十五年七月　四九九
後記　五五一

賴
朝

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

引

歴史家は文明の歴史を供給するに於て其の重大の任務と責任とを有して居る。歴史家に對つて古への野史氏の爲せるが如き興味ある小話を供給せんことを要求するのは大に間違つて居る。此の意味からして古英雄の個人としての事蹟は漸くにして今の歴史からは閑却されても亦已むを得ぬのである。然し古英雄の個人としての事蹟は之を談ずる價値が無いのでは無い、少くとも其の興味ある點に於て之を抛棄し去る可からざる者が有る。此の頼朝は然樣いふ點から書いて見た。事實は皆本づくところが有つて、捏造や假託は全く爲さぬのである。けれども無論歴史家の領域に入つて其の眞似を爲たのなどでは無い、言はゞ頼朝に關した一夕話を試みたといふ可き迄のものなのである。

明治戊申初秋

目次

判官贔負……五
鬼武者……一一
英氣……二四
生死の關……五三
優美……七六
機運……九四

判官贔負

世に判官贔負といふ言葉がある。判官とは判官義經を指して言ふので、源九郎義經が先づ恐ろしく勇威を振つた木曾義仲を宇治川の一戰に駈け破つて之を粟津に打取り、次いで平家の一門を一ノ谷や屋島や壇の浦に攻め詰め攻め詰めて終に之を滅ぼし殲して仕舞つた大功の有るのにかゝはらず、鬪戰が濟んで仕舞ふと、芽出度凱旋したのを歡迎しても呉れ無いばかりか、鎌倉へ入ることも許され無いで、金洗澤といふところに關を据ゑられ、腰越といふ東京に比べて言へば品川のやうなところまで辿り着いただけで逐ひ還され、それからは土佐坊昌俊に夜討を掛けられたり、作り山伏になつて木にも草にも心を置きながら北陸道を奥州へ落ちたりして、最後には高館で腹を切つて死んで仕舞つたか、それとも蝦夷唐太へ逃げ漂泊つて、とゞの詰りが滿洲へ渡つたか何様か知らぬが、何にしろ文治の五年からは日本に見えぬ人になつて仕舞つたので、實に氣の毒でもあり、かはゆさうでもある其の爲に、誰しも判官を贔負するやうにもなり、義經を悲しい目に遇はせた梶原平三景時や、景時の讒言を聽き入れた義經の兄の源頼朝を惡み罵るやうになる、それをば判官贔負と呼び慣はして居るのである。

如何にも義經はたつた二歳の時から既に憂さ辛さの此の世の風に身をさいなまれ初めて、大和の宇多の郡を心ざして都の九條を迷ひ出た母の常盤が懷に抱かれながら、春まだ寒き二月九日の夜半、清水の觀音の御寶前に詣つてから、十日は餘寒の雪嵐に、暮れて伏見の大伯母が許を尋ねても、朝敵の妻子だと云ふので居留守をつかはれて逐拂はれ、やうやく賤しい民の家に露宿の酸苦だけは免れたが、さて宇多の龍門の牧の岸岡といふところの大伯父の許に潛み隱れた其の甲斐も無くつて、母の常盤の母を搦め取られて人質にされたために母は自首し無ければならなくなつて、終に仇敵の平清盛の手の中に攫まれた小雀となつて仕舞つた、それが抑〻の苦勞の發端で、鞍馬寺の苦學、金賣の吉次に附いての奥州下り、詳しく義經の胸の中に入つて考へて見たらば、どれもこれも涙で無い事は殆ど無かつたらう。家の仇敵の平家の繁昌、一門の微祿、家の子郎黨も時に從ひ世に媚びて居る情無さ、物心おぼえてからは、明くるにつけ暮るゝに付け悲憤の腕を取り絞り齒を切つた事であらう。大納言成親や西光法師のやうな本錢の少い弱蟲共がなまじひに勝負と出掛けて却つて平家を太らせ、腰の曲つた老人が昔執つた杵柄の積りで威張り出しても直に氣息が斷れて仕舞ふやうに是も矢張り敵に勝星を殖したるに過ぎ無かつた一族の賴政の事を聞いたりして何の樣にか胸苦しく思つた事だらう。堪へられなくなつた兄の賴朝が大事を擧げてから、大風に草木が鳴り出して、天下はたゞならぬ有樣になつて來た。さあ我慢も辛抱ももう仕切れ無くなつて、親分と賴んだ陸奥の秀衡が急くな〳〵と云つて呉

れたのをも、尻に聞かせて飛び出して終つて浮島が原で兄に對面した。それからは强敵大敵を目の前にしての苦勞心配だ。どんちやんどんちやんで三年の月日はなか〳〵短くは無い、鎧蝨に吸はれた血だつて少くは有るまいに、まして敵の木曾義仲だつて木曾山育ちの荒武者で、駒王と呼ばれた童立の時から平家を打挫いて呉れやうの一念の火を燃やして、平家の世盛りにさへ都へ上つて世の樣を覗つた程の不敵の傑物で、それに從ふ今井の四郎樋口の次郎以下皆いづれも火の團なりとも攫み兼ね無い奴等では有り、平家にしたところが新中納言知盛薩摩守忠度の樣に確としたのも有り、能登守教經のやうにヤケなのもあり、侍には景清盛俊忠光のやうに刃金を鳴らしたがる奴も有つたのに、搗てゝ加へて我が陣の中にも、兄の賴朝にさへ一目置かせる譯の仔細を有つて居て、しかも心が剛で才の鋭い梶原平三のやうな奴が軍目付となつて居て、兎角に弓を挽かうとすれば肘に觸る如き事をするのだつたから、六百年餘を過ぎた今日盛衰記を讀んで見て平家は弱いなどと笑つて噂する我等には、思ひ遣る事も覺束無い程の澤山な苦勞を爲たに相違無い。其の義經が碌に榮耀らしい事もせず、賞といつては日本六十餘州の半分は宛行はれぬまでも五ヶ國十ヶ國は宛行はれても不思議は無いのに、たつた伊豫一國の守になつただけで、終に片田舍に苦み死を爲て仕舞つたのだから、判官贔負の出て來るのは實に人情の自然で、誰しも判官を好いて景時賴朝を惡む。然し考へて見ると景時も憫む可きで、景時は詰り一生惡まれ役を引受たのだが、景時が有つたので賴朝の事業は半分出來たと云つても宜くは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

無いかと思はれる位だ。人に仕事をさせる場合には何様しても之を見張る者を要する。造船所に一船を建造させるとすれば、無論技倆あり信用有る造船所に任せるには相違無いが、又必らず聰明な人をして目付役卽ち工事の監督をさせるのは誰も爲る事である。此の監督者と造船所とは、中が好過ぎて貰つては困る。隨分取扱ひ難いやうな性質の人で、そして飽迄聰明で、造船所に取つては些厄介な監督者が、船の注文主に取つては益が有るのである。義經は造船所、景時は工事監督で、賴朝は無論注文主である。景時と義經と中が好く無くて、喧嘩まで爲たのは、造船所も監督に賄賂など餽らぬ立派な自信の有る造船所で、監督者も造船所に呑まれて仕舞はぬ立派な手強い監督者で、そして然樣いふ造船所に仕事を托し、然樣いふ監督者に監督を命じて置いて、澄まして座蒲團の上で煙草を飲んで居た注文主も實に立派な注文主であると云はなければならない。景時を憎まうよりは景時と義經とが意氣張りづくになつて競合つて居た樣子を考へて、二人と賴朝とが皆立派な人で有るのに感心して、そして特に敵役を引受けて儼として遣つて退けた景時には寧ろ同情しても宜い位である。義經に對してばかりでは無く、戰鬪に於てばかりで無く、一切の人々に對し、一切の場合に對して、景時は實に憎まれ役を仕たので有るが、此の憎まれ役が有つた爲に何の位賴朝の仕事が工合好く成し遂げられて居るか知れ無いのである。太閤には石田、信玄には跡部、長坂、此等は戰爭には意久地は無いが、何樣も矢張り憎まれ役を引受けた者で、講釋や軍書に現はれて居るやうな唯無暗に御機嫌取りの佞奸者で

は無いらしい。然様で無ければ太閤や信玄のやうな恐ろしい人が、講釋師や軍書作りよりも馬鹿者のやうで些辻褄が合は無くなる。身上が大きくなれば、何様しても憎まれ役が無くては濟まぬ傾が有るらしい。信長や國性爺は自分で憎まれ役を勤めた氣味があるが、大將が自分で憎まれ役を勤めるなどは面白く無い。東照公は憎まれ役に誰を用ゐられたといふ事も無いやうだが、是は或人を或時だけづゝ用ゐられたらしい。成程人を以てせずして時を以てした方が可いかも知れぬ。兎に角古今を通じて憎まれ役の大適任者は梶原平三だが、其の代りかはゆさうに、武勇は二度の掛にも知れ、文事は早速の連歌、一族の詠歌屬文にも知れ、心の剛なのは大庭三郎景親（古よりオホバと訓んで居るけれど大場といふ伊豆の地名をダイバと訓む故にダイバ歟と疑ひおもつたが、伊豆山の舊記にそれをオホバと訓んで居るさうだから矢張りオホバで宜いのだ）と伏木の爭を爲たのにも知れ、思慮の深いのは賴朝を見逃したのにも知れて居る程なのに拘はらず、人々に憎まれて終りを善くせずに仕舞つた上を、恨も何も無い後の世の野次馬にまで散々に惡く言はれて居る損な役廻りを受取つたのだから、案外人は好かつたかも知れぬ。が、梶原景負などは一人も無いし、著者の如きも矢張り何様も好かぬ。賴朝も亦景時同樣に判官景負の心からは餘り好くは思はれぬ人である。中には判官景負が高じて、賴朝は大功の有る弟の義經を猜み忌んで遂に之を殺した、殘忍な人である、刻薄な人である、義理も人情も知らない人であると云つて酷論痛罵する人もある。然し義經も宜くばかりは無い。身に功が有れ

ばと云つて、兄の頼朝がまだ昇殿をも許され無いのに兄に一應の申合せもせずして敍位任官したり、平家の一族時忠の女の聟になつたりして、其の上に苦し紛れの所行なれば罪は少いやうなものであるが、文治の元年十月を以て强ひて願ひ訴へて兄頼朝を追討するの勅許を頂戴したりなんどしたのは、何様しても免れられない罪の有る事で、旗持になつて居た安達新三郎清經といふのが、實は頼朝の方から來て居た隱し目付、即ち今謂ふ探偵だつたから堪らない、兄を追討する勅許を取つた事を感づくと直に鎌倉へ逃げて下つて、これ／＼だと告げると、あゝ九郎は頼朝が敵にはよく成り居つた、と頼朝が言つて、ソレッと云ふので義經對治が始まつたのである。元來世の中と云ふものは奇妙なもので、手柄を立てたらば手柄を立てたのだから其で宜さゝうなものだが、目上を凌ぐほどの手柄を立てると身は必らず危い。義經が木曾や平家を滅ぼして首尾能く大手柄を立てゝ仕舞つた其の時は、もう愍む可しおち／＼と此の世を樂むことは出來なくなつて居たのである。實に愍然だが仕方はない。假に頼朝を義經が凱旋した時に頓死させたとしても、義經が末始終安穩だつたか何様だか、覺束無い談である。何も頼朝が好んで義經を殺したとばかりは云へぬ、義經自身にも自身を面白く無い運命の下に置くやうな理合になる種子を澤山に持つて居たので有ると云ひたい。然し今こゝに義經の論を爲る氣は無い。たゞ判官贔負の餘りに人は頼朝を甚しく惡く言ふが、頼朝といふ人は一體まあ何のやうな人で有つたらうか、といふ緒を發くまでに判官贔負といふ語を假りて來たまでなのである。頼朝は何様い

ふ履歴を有つた何様な人なので有らう。

鬼武者

丁度頼朝時代の賢人が、仁は愛の理なり心の徳なりと説いたが、實に此の愛の理心の徳よりも貴いものが人の世に有らうか。春の日の光のやうな和らかみと暖みと、それが卽ち仁愛の姿であつて、それに照らされ、それに烘らるれば、千草萬木、皆悅びの芽を張り、笑の花を捧げて、そして自分自分の體に有つて居るだけの美しさと氣勢とを現はし、各〻の作用と生長とを十分に遂げるものである。人の仁愛の下に立てば、悍馬は駿馬となり、惡狗は良狗となり、牡丹は一尺の玉を展べ、松は千尋の繒蓋を張るものである。之に引換へて仁愛の光に疎く育てば、駿馬も人食ひ馬となり、良狗も狂狗となり、牡丹はかじけ花しか咲かず、松は半枯の醜い姿を現はすやうになる。此の道理で、人の仁愛は一切のものを善くし、人の仁愛無きは一切のものを惡くする。まして牙角皮毛の賴もしきものも無く、爪や蹄や嘴や筋骨の强さも無くて、そして禽や獸とは違つて物思を多くする弱〻しい人間といふものは、人の眼遣一つにも悅んだり恨んだりするほどのもので有るから、仁愛を受けて育つのと、仁愛無く育てられるのとでは大層な差違を生ずる。眞の父や母に幼い時から離れて、無慈悲の人の下に人となつたものは、何様しても優しみや和らかみや伸〻したところが足らない。丁度土や水の少い巖山

の北陰に育つた樹が、幹も固く枝振も面白く、抜群の趣致の有る姿は仕て居ても、すらりとした安らかなところは無いやうなもので、親の仁愛を受け足らずに育つた人は、却つて其の爲に隨分千萬人に勝れた人に爲るのも有るが、何樣もむつくりとした溫和な丸みの無い、酷い、どぎつい、いがらい、恐ろしい、人を殺して眼を盼せざるやうな人になるのが多い。それで、昔からの偉い人には、抜群の趣致の有る姿の樹が、水や土や日の光の足ら無い岩山に苦んで育つたのに多いやうに、人の仁愛を受け足ら無いで育つた人が中〻多い。そして又人の仁愛の足ら無い巖山の北陰のやうなところに育つた人には、和らかみの無い酷い人が有り勝だ。賴朝は弟の義經を殺した。義經は後にこそ賴朝追討の宣旨を强ひて頂いたりなんぞしたが、何も最初から兄に敵對をする心持は無かつたらしいのである。賴朝は又弟の蒲の冠者範賴を殺した。範賴は義經に比べては才は鈍かつたやうだが、性質は優しかつたやうで、文治元年に賴朝に疑はれた時には、百日に百枚の起請文を書いて、決して兄上に對して勿體無い儀などを存じ申ますまいと、梵天帝釋諸神諸佛を掛けて誓つた位の人である。其の疑はれた仔細も範賴の優しい人だといふ證據になる。といふのは、義經が賴朝の方から打手に來た土佐坊昌俊を斬つて仕舞つて、愈〻敵對の色を現はした時に、賴朝が範賴に對つて、汝打手の大將となつて都へ上り義經を打つて來い、と命じたのを、御言葉を返すのは恐れ入りますが、同じ兄弟の中にも九郎義經とは、木曾の征伐、平家の追討、西國所〻の合戰まで、心を協せ助け合ひて、力になりつなられつ、

睦まじう致したる上、特に智謀勇略も立優りたる彼有りたればこそ何事も首尾能く仕遂げたるに、其の義經を我が手に懸けて打たんことは、餘りに情無く不便に存じますれば、何様か此の義ばかりは御免下さいまするやうに、と斷つたところが、それが恐ろしく頼朝の氣に障つて、さてはおのれも九郎の二の舞をする氣か、と云つて頼朝は奥へ入つて仕舞つたと云ふのだが、天下を握つて居る頼朝だから一言半句の言葉を反されても悦ばないのは無理も無いけれど、これは範頼の言葉の方が人情にも叶ひ道理にも合つて居て、まことに其の人柄も思ひ遣られるのである。其の範頼を何様いふ譯で殺したかと云ふと、頼朝が富士の裾野の狩に出た時、曾我の十郎五郎が工藤祐經を殺して、それから出合つた武士共を切つて捲つて五郎は終に頼朝の座所近くまで斬り込んだ、其の大騒動が鎌倉に聞えて、頼朝も打たれたなぞといふ噂さへもちら／＼と有つたので、殘つて居た頼朝の妻の政子が大變に騒いで歎いた、それを不在を守つて居た範頼が慰めて、範頼がかく居りまする以上は御代は何事が有りませうや、御安心なされまして、と云つたといふのが根で、扨は世に心を懸けて居るか、と疑はれたのである。此も何も底意が有つておのづから然様いふ言葉が出たのでは無い、たゞ餘り嫂の政子が取亂して騒ぐので、心強く頼もしく思はせやうとて、わざと然様言つたに過ぎまいでは無いか。然し兎に角口は禍の門で、其の言葉から疑が掛かつたので、範頼は是非無く家隷の太夫屬重能といふものに、決して不忠を存ぜぬ由の起請文を持たせて鎌倉へ遣つた。すると間の悪い時は悪いもので、建久

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.